平成２８年１０月３日（月）

老球の細道２７２

９月の言葉

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

今月は大げさな言い方であるが天国と地獄を経験した。１年に一度の恒例の人間ドックがあった。このところ血圧も腰も副快調、今回のドックは要精検もなく無事終了するだろうと油断全開であった。さすがに神様は油断者には試練を与えてくれる。最終検査の胃カメラになったら、突然食道におかしな状態があるので「生検！」。結果の出る１週間、朝から晩まで、寝ている時も「ガンだったらどうしよう」のストレス全開。結果は異状なしであったが、いずれやってくる死の恐怖を背負った生き方に耐えられるのだろうか。

１・読書から

◆「“いつも”がよくなければ“いつも通り”とは言わない」〈コーチングクリニック〉

試合当日だけが最高の状態であればいいという考え方ではなく、普段から最高の状態を目指す日々の積み重ねでありたい。毎日が「特別な日」。

◆「ガンと知らされて、“私の生涯は今日から始まる”とは、何という決意だろう」
「たとえ世界が明日終わりであっても、私はリンゴの樹を植える」
〈柳田邦男『ガン５０人の勇気』〉

ガン＝死のイメージが強い。もしガンの宣告をされた時勇気ある人たちはどのような覚悟を決めたのだろう。自分に置き換えながら読んでみる。死ぬ間際までバスケットボールのことなど考えていられるだろうか。お彼岸の日、父母のお墓の前で自問自答した。

２・新聞等のコラム、その他から

◆「事件は人生を左右する。優劣はない。トップとして大切にするのは“初々しい正義感”。だからこそ、自分を含め、全員に問い続けたい。なぜ、検事になったのか、と」
〈朝日新聞・ひと・検事総長に就任した西川克行さん〉

何歳になっても持ち続けたい初々しさ。どんなことにも毎日全力で取り組み、明日が待ち遠しくて仕方がなかった頃を。休んでいる暇はない、休むのは棺桶に入ってからか。

◆「思った通りに、生きて生きて、生ききる。人間が志を全うするということはそういうことだ」〈朝日新聞・文化、芸能・北方謙三『大水滸伝』〉

同調圧力という言葉がある。空気を読んで周りの行動にあわせることをいう。若い頃からマイペースで周囲とはなかなか歩調を合わせることができなかった。わがまま、自分勝手などと悪口も言われたが、自分の人生、他人の顔色をうかがいながら生きる余裕はない。

◆「私なりに考える勝つコツは、やはり“いかにツキをもってくるか”ですね。いつも明朗快活に振る舞い、苦しくても諦めない。このあたりにツキの源泉があるんだと思います」
〈週刊現代・社長の風景・クレデイセゾン・林野宏〉

バスケットボールコーチも同じ。明るくて元気のいい人に人が集まり、粘り強く諦めない人に人がついていく。そして、その人のために労を厭わず皆ががんばる。自ずと勝利の女神が後ろ髪を引く。

◆「自分は、きっと想像以上だ」〈ポカリスエット・キャッチコピー〉

日本人は謙譲の美徳の文化をもつ。自分を過小評価するのが常。しかし、本当はすごい力を持っている。私は、私が思っている人間にしかなれない。夢は大きく、態度は謙虚に。